

論説

タイ社会と教育格差

兼光由美子

評価官

WFP アジア太平洋地域事務所

話題のタイ映画

タイにある国連機関に勤務してもう7年以上が経ったが、過去に住んだ様々な国の中でもタイは私の中では分かりにくい国のトップランキングに入る国である。何年住んでも理解できないことがたくさんあるのだ。なぜこの分かりにくさがいつまでも残るのかと考えてみたが、タイは現在も軍事政権が続いており、言論統制や不敬罪などタブーな事柄が多いので入ってくる情報が限られていることと、タイ人でタイ社会について外国人に分かるように話してくれる人が少ないからではないかと思う。

長年住んでいるにも拘わらず、まだまだ分からないことだらけのタイであるが、タイの教育について、日常で感じることを書いてみたいと思う。今年5月、バッドジーニラスというタイ映画が公開され話題になった。その後この映画はタイ国内のみならず、中国、韓国やその他の東南アジア諸国でも上映され話題になっている。

映画のあらすじは、学業成績の優秀な高校生の女の子が奨学金をもらい名門校に入学するのだが、そこで成績不振の金持ちの同級生に誘われ、徐々にカンニングをビジネスにしていく。カンニングビジネスで金儲けをするうちに、いつしかそのビジネスはアメリカの大学進学適性試験のSATにまで発展していき、、、という話である。

この映画は中国で実際にあったSATスキャンダルをもとに作られた映画ということだが、タイ社会の抱える問題をエンターテインメントという形で見事に表現した作品であった。検閲や規制の多いタイでよくここまで社会風刺ができたものである。

複雑な格差社会と教育問題

この映画が指摘する問題は、タイがもの凄い格差社会だというだ。OXFAMの2016年の報告書によると、タイは、ロシア、インドに次ぐ世界第3位の格差社会とされている。2008年には5名だったタイの大富豪は、2015年には28名になった一方、タイ人口の全体の10%（約7百万人）が貧困層とされている。また、タイ人の4分の3以上の人々が土地を所有しておらず、タイ全土の土地所有の61%が10%の富裕層の手にあるということである。

格差というのは、まず首都であるバンコクとその他の地方との格差であるが、その差は非常に激しく、教育に関しても、質の高い学校はほぼ全てバンコクに集中している。そして、タイは社会階層が非常に明確な社会でもあり、バンコク市内でも学校教育の質が均等では

ないため、私の周りでも経済的に余裕のある家庭は子どもをインターナショナルスクールや私立の名門校に行かせたがる人が多い。しかし、名門校に入学するには高額な寄付金を要求されるという事実があり、映画の中でも主人公の父親が高額の寄付金を学校から要求され、それがきっかけとなってカンニングビジネスが始まるという場面がある。実際、高額寄付金を払える家庭の子どもは有力者の子弟が多く、教員の友人がそういった子どもに強く指導するのはとても難しいという話もしていた。

従って、タイでは地方に生まれるか首都に生まれるか、あるいはその家の社会階層と家計収入によって受けられる教育の質にかなりの差が出てくるのである。また例えば名門校へ入学したとしても、教室内の生徒の学習格差が非常に大きい。映画の中でも、金持ちの成績不振の生徒が出てくるのだが、実際、タイの学校教育は幼少期や低学年から非常に記憶力重視で、難解な教科書をどんどん記憶していける子どものみが優秀な生徒として生き残っていくようだ。

記憶力重視の教育と格差問題

授業も記憶力の良い、つまり成績の良い生徒を中心に進められていくため、できない生徒を救うとか、全体を底上げしていくという教育方針は全く取られないという話をよく聞く。そのため記憶力の得意でない子どもはどんどん落ちこぼれ、学級あるいは学校内でも格差が広がっていくということだ。

例えば、タイの学校には連絡帳などメモを取る習慣がなく、低学年の子どもにも先生から宿題が口頭で伝えられるだけなので、宿題があることやどのページをやっていくかということ記憶できないとそのまま何もしないうちに授業が進んでいってしまうそう。また連絡帳がないので親も確認するのが難しく、子どもの学習が遅れていっていることに気が付かないことがよくある様だ。また留年というシステムもないので、分からないまま卒業を迎えるということも多いということである。ちなみに OECD の実施する学習到達度調査 (PISA) の 2015 年の調査結果は、タイは 70 か国中 54 位である。

タイで実際に使われている教科書も見せてもらったが、小学校低学年の教科書とはとても思えないほど字数が多く、音楽の教科書にはタイの様々な古典楽器の名前と特徴が羅列しており、小さい子どもがこれに果たして興味を持って読むものだろうかという疑問がわいた。

タイ人は普段は明るく楽しいことが大好きな人たちであるが、勉強になると情緒や遊び心を全く排除したものになる様だ。経済的に余裕のある家庭だけかもしれないが、幼児教育もとても盛んで小さいうちから文字を書かそうとするので、大学勤務の友人によると、20代のタイ人の鉛筆の持ち方がおかしいと言う。手が小さいうちに長い鉛筆を無理に持たせ

るため、そのままおかしな持ち方で大人になるのではないかということである。40代以上のタイ人にそれは見られないということなので、近年になって都市部に住む経済的に余裕のある家庭の親が早期教育に熱心なのかもしれない。

記憶力と問題解決能力は別ものか

算数にしても、日本では小さいうちは数字に慣れ、算数的な発想をするために、数を数えて物の色を塗ったり、図形を書いたりする練習が多いが、タイではそういう過程はとても短く、小学校に入るとあっという間に計算式を始めるということである。なので幼児のうちに3桁の計算が機械的にできるようになるのに、実際に買い物に行っても買い物計算ができない、つまり応用ができないということが多々ある様だ。

記憶力重視で応用ができないというのは、実はタイに住んでいると日常的によく直面する問題なのであるが、教育の話をしていると納得がいくところが多い。民間勤務の友人がタイ人スタッフに「利益率を10%あげなさい」という指示したところ、有名大学出身のスタッフが意味が分からず愕然としたという話をしていて、数式にしたら理解できるのではないかと、半ば真剣に冗談を言っていた。

民間企業と言え、バンコクには1万社以上の日経企業があり、企業の関心はタイ人の優秀な人材を見つけマネージャーに育て会社を任せて現地化していくかということだが、日経企業の駐在の方から、タイ人は優秀な人とそうでない人の差が非常に激しいという話や、タイ人スタッフの問題解決能力が低いという残念な話もよく聞く。

そして、それは私の勤める国際機関でも感じるのがあるが、英語が堪能で非常に雄弁なのに、実際のオペレーションになると、どうしていいか分からなくなる人が有名大学出身者に時々見られる。そのことが不思議でタイの大学に勤務する方にも伺ったが、タイの教育は基本的に記憶力重視の上、歴史的にも通訳を通して東南アジアの植民地化を狙う列強諸国の合間をうまく拭って植民地化を免れてきたという経緯があるので、語学専攻が尊ばれ、大学でも語学部が難関学部になるということだった。そういえば、国際機関勤務のタイ人のスタッフには語学専攻の人がたくさんいるように思う。語学専攻だから問題解決能力が育たないということではないが、幼少期から記憶力重視の教育なので、記憶力のいい成績優秀な生徒は必然的に語学専攻になるであろうとは推測する。

格差が生む不正問題

そして先の映画の話題の中心はカンニングであるが、カンニングのことを率直にタイ人の知り合いに聞いてみたが、あれは映画の話だという人と、よくあるという人に分かれた。実際のところはよく分からないが、インターネットでタイのカンニングについて検索をすると、下記の写真のようなカンニング防止対策のかなり笑える写真が出てくる。



カンニングや不正を擁護するつもりはないが、タイに長年住み、格差社会を実感する身としては、不正の方向へ人々の心理が働くというのも分からなくもない。というのも映画を観ても分かるが、社会階層というものが歴然と存在し固定されてしまっているため、不平等を覆す手段がないのである。成績不振でも富裕層であれば親が寄付金を払って名門校に進学することができるが、そうでない社会階層に属している場合はどんなに頭が良くて成績が優秀でも乗り越えられない壁がたくさん存在する。従って、真面目にやっているのは損をするという風に人々が考えるのも不思議ではない。しかし、こういう不平等社会の中でバレなければ何をやってもいいという風潮は、社会の腐敗を生んでいく原因になる。トランスペアレンシー・インターナショナルの公表した 2016 年の腐敗認識指数ランキングでタイは 176 カ国中 101 位になっている。

格差社会の未来

タイの教育を見ているとやはり社会の中間層を作り上げていくという教育政策にはとても思えない。中間層を作り上げる気がないというのは、やはり既得権を持ち恩恵を受けてきた人たちに富の分配をする気がなく、このまま不平等な格差社会を維持していきたいということなのだろうと思う。教育はその国の未来を創るための投資なので、教育問題を見るとその国をデザインしていく立場にあるエリートたちの描いている未来図がよく分かる。

タイは外国からの観光客も多く、微笑みの国として明るいイメージのある国のため、外からはなかなか事情が分かりにくい国だが、とても分断された社会で、その分断された社会の亀裂を埋められないことが長年続く政治不安の大きな原因である。しかし、一番の根本的な解決になるであろうと思われる教育に、格差解消などの対策があまり見うけられないのは非常に残念なことである。

広まりつつある格差問題と考察

ここまでタイの教育と社会問題について思うことを書いてきたが、実はタイのことを考える時、日本の置かれている状況とも類似している点も多く、また個人的にも子どもを持つ母親として早期教育や記憶重視教育の問題など非常に身につまされるものがある。

最近よく思うのだが、これまで途上国開発は、遅れている途上国を先進国が援助するというメンタリティーが援助をする側にも援助を受ける側にもとても強かった。しかし、先進国が途上国の問題解決方法を知っているのではなく、近年は寧ろ双方の問題が非常に似通ってきていると思う。

例えば、タイの様な国がどんどん中進国になり経済的に豊かになる一方、これまで先進国の中間層だった人たちがどんどん貧困層に落ちていくという現象が起きている。そのため、先進国内でも所得格差が広がり、国内に南北問題を抱える様になっている。日本でも格差という言葉がメディアで目にしない日がない。

この様に格差が広がり中間層が薄くなるというのは、タイの様な新興国や途上国に固有な問題ではなく、先進国でも急速に起きている現象であり、そういった意味で、途上国開発援助をする私たちも、初めて格差というものを自分たちの問題として考える様になったのかもしれない。タイの地方と都市部の格差、社会階層の固定化と教育の問題など日本の状況とも非常に共通したものがある。

過去の経験は変化の激しい時代において問題解決に役立つか

また、大概の人はある程度の教育を受けているので、教育について語るとき批評家の様になってしまうと思う。私もその一人でタイの教育について批判的に書いたが、かくいう私も昭和の日本の大量生産時代の教育を受けており、記憶重視教育だったので、自分に問題解決能力があるかどうかは自信がない。

また、子どもを持つて思うのは、自分が受けてきた教育をもとに子どもを教えるため、思考力が大切だと言いながら、自分の子どもに実際教えているやり方は記憶重視だったりするものだ。なかなか自分の許容範囲を超えた考え方は人間できないものである。教育はその国の未来を描くものであるとはみな分かっているとは思いますが、政策を作る側も過去に受けてきた自分たちの教育や経験をもとに考えるので、未来を予想して教育政策を練っていくというのはとても困難なことであると思う。得に現代のように変化の激しい時代においては、過去の経験がどれだけ役に立つものかと思うことがある。

終わりに

タイ映画の話からタイの教育と社会問題を考察してみたが、難しい問題のため結論というものではなく、ありきたりな締めくくりになるが、格差解消は現在世界的な共通課題であり、中間層を作っていくということをあらゆる方面から真剣に考えなければならない時にきているのだと思う。